

月刊 介護保険

介護に携わる人の
応援マガジン

特集

介護保険制度改正の 内容を決定へ

社会保障審議会介護保険部会

2014

1

vol.215

● 現地ルポ—自治体編

効果的な介護予防で保険料の適正化をめざす
新潟県上越市の取り組み

● 現地ルポ—事業者編

最期まで人生の尊厳を守る地域の「居場所」
NPO法人さわやか徳島「幸せの家・ありがとう」(徳島県板野郡藍住町^{あいずみ})

● レポート

若年性認知症を地域で支える
社会参加や就労支援の現状をみる

株式会社 法研



街

へ出よう！

「トランベルヘルパーが教える外出の

コツ

」



NPO法人
日本トランベルヘルパー協会
理事長 篠塚 恭一

PROFILE しのづか・きょういち

株式会社SPIあ・える倶楽部代表取締役。
平成18年にNPO法人日本トランベルヘルパー
(外出支援専門員)協会を設立。

公共施設を使いこなす ～テーマパークから寺社仏閣まで～

「残された時間を家族旅行で思い出にしたい」。

そんな希望を叶えようと、主治医が介護旅行を応援してくれることがあります。映画「風立ちぬ」でも肺を患った主人公が信州で養生する場面がありましたが、ターミナルケアを受けている人、死期が迫る患者に自然環境のよい場所への転地療養をすすめることが今もあり、そうした転院の際に看護資格をもつトランベルヘルパーが付き添うケースがあります。湯治で有名な秋田県の玉川温泉など、遠方で長期滞在の際にケアを依頼されることもあり、私たちも可能なかぎりの対応を心がけています。

これまでは本人や家族が「死」をタブーとする向きは大半でしたが、超高齢社会を迎え、日常会話にも介護の話、最期をどう迎えるかという話が増えました。いずれは誰もが死を迎えるわけですが、それでも老いを認め、介護サービスを受け入れることにはまだ抵抗があるようです。いかに死を迎えるのか、それまでにどのような時間をもてるか、戸惑いながらもその可能性を探ることは家族の務めだと、後から教えられました。

私たちトランベルヘルパーは、そうした心情を受けて身体状況や可能なADLを聞き取り、普段の介護をする方と情報を共有したうえで、旅行日程と旅先で行うケアについてアセスメントを行い、さらに家族の希望を聞きながらトータルなサービスプランを作成していきます。

とくに旅行日程をつくる過程では、たんにバリアフリーのホテルや交通機関を選択するだけでなく、その方にとって最良のプランは何か、比較検討しながら参加型で作業を行うことで、本人の主体性が生まれます。たとえば孫と一緒に、ユニバーサルデザインが行き届いたディズニーランドをホテルとセットで薦める際には、自宅や最寄駅からの交通手段を教えてもらい、途中で車いすが必要となる方なら、どこまでがんばれるかを聞いたうえでその手配を行います。

一方、受け入れる宿泊施設側、たとえば「かんぼの宿」や「休暇村協会」など、公共の宿と呼ばれる宿泊施設には、高齢となった家族を連れた旅行客が宿泊先に求めることは何か、立地する地域の方にも協力をあおぎ、シームレスな受け入れ体制の整備を提案しています。

杖を使えば、歩行が可能な方なら多少の不自由を覚悟で宿坊の滞在を薦めることもあり、トランベルヘルパーの研修先にもしています。そこで主に頼むのは、死を受け入れる準備をしたいという人と話す時間をつくってほしいということです。若く元気なときのお参りであれば、あれをしたい、これをしたいと先のお願いが多いものですが、介護旅行を利用する人には、静かに死を迎えたいと望む声があるからです。最後の思い出と覚悟しながら、家族の戸惑いはいつも見え隠れしていて、旅はリハビリというのは、家族の心を癒すという期待でもあったと思います。